



中学校部会会報

全日本音楽教育研究会

令和4年3月1日発行 通算第81号

音楽教育のさらなる飛躍をめざして

全日本音楽教育研究会中学校部会長
荒川 徳子（府中市立府中第七中学校長）



「令和3年度になれば、状況が良くなるかも…」と淡い期待を抱いて始まった令和3年4月。学習指導要領も今年度から全面実施となり、気持ち新たに頑張ろうと、誰もが思われたことでしょう。しかし夏には第5波到来。その後急激に感染者数が減少し、ほっとしたのも束の間、年明けには予想だにできなかったスピードで感染者数が増え続け、現在第6波の真ただ中。その波は学校にも押し寄せ、我々音楽科にとって厳しい状況が続いています。しかしこの2年間、先生方は子どもたちの学びを止めることなく、工夫を凝らした授業をされてきました。そのことは先生方の財産になったことと思います。明けぬ夜はありません。必ずやまた子どもたちが生き生きと音楽を楽しむ日がきます。今はできることを確実にを行うことに全力を注ぎましょう。

さて今年度6月、2年ぶりに全国理事会・研修会を開催しました。社会状況を鑑み、本部常任理事のみ江東区文化センターに参集し、支部長先生方にはオンラインで参加していただく形態としました。当日はこれまでの最多となる38支部の支部長先生にご参加いただき、オンライン開催の良さを実感しました。理事会は滞りなく進み、全ての議事が承認されました。ご協力に感謝申し上げます。ありがとうございました。今年度は役員改選の年にあたっておりましたが、役員も提案通り承認されましたので、引き続き部会長を務めさせていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

全国理事会後の研修会では文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官の河合紳和先生より「新学習指導要領を踏まえた中学校音楽科の授業と評価」についてのご講演をいただき、学びを深めることができました。実際に新学習指導要領に則って授業を実施してみると、様々な疑問も生まれていましたが、先生のお話を聞いて納得することがたくさんありました。その内容は支部長先生方が各支部の先生方に伝達くださったことと思います。

また今年度「新学習指導要領全面実施における3観点評価の実践事例調査」を全国の先生方に行い、全国より131件の回答をいただきました。ありがとうございました。調査の結果をまとめ、報告書を各支部にも送付いたしました。この報告書を参考にいただき音楽科における指導と評価の一体化に役立てていただければ幸いです。

令和3年度全日本音楽教育研究会全国大会八戸・三戸大会で、種市八重子実行委員長先生をはじめとした実行委員会の皆様、3年間に渡り取り組まれた研究の成果と課題をまとめた大会冊子は3月下旬に発行されます。大会関係者の皆様に心より感謝申し上げますとともに、ご購入の申し込みをいただいた全国の多くの先生方に御礼申し上げます。

子どもたちが心の底から音楽を楽しむことができる日が1日も早く訪れ、そして、令和4年度全日音研全国大会(総合大会)山口大会で皆様と再会できますことを心より願っています。

最後になりましたが、皆様方のご健康とご活躍をお祈り申し上げますとともに、より一層の本会へのご協力を賜りますようお願い申し上げます。

Contents

- P1 会長あいさつ 全日音研中学校部会長 荒川 徳子
- P2 全国理事会
研修会「新学習指導要領を踏まえた中学校音楽科の授業と評価」
文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 河合 紳和 先生
- P5 令和3年度 全日本音楽教育研究会全国大会 八戸・三戸大会
研究を振り返って 青森県支部長 米田 裕子
- P6 令和4年度 山口大会に向けて
山口県支部長 松田 和寛・Information

発行

全日本音楽教育研究会 中学校部会

東京都府中市武蔵台 2-4
府中市立府中第七中学校内
部会長 荒川 徳子

◆全国理事会◆

日時：令和3年6月25日(金) 13:00~16:00
会場：江東区文化センター 研修室
司会：事務局長 佐藤 隆弘



今年度の全国理事会は、2年ぶりとなる開催であった。また、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、中学校部会常任理事は会場に集まり、各支部長先生方はオンラインによる参加という形をとった。今回は38支部の支部長先生方にご参加いただき、開会となった。会は荒川部会長あいさつで始まり、各支部長自己紹介に続き、議事に入った。今年度はオンライン開催ということで議長は中学校部会事務局清野次長が務め、令和2年度事業報告、会計・会計監査報告が承認され、続いて令和3年度役員案、活動方針案、事業計画案、予算案、表彰者案が審議され承認された。続いて、今年度の調査研究についての提案、会費納入のお願い、今年度の要覧作成のお願いについて、各部より提案された。次に全国大会「八戸三戸大会」「山口大会」について紹介があり、全国理事会を終了した。

リモートでの開催は中学校部会では初めての試みであり、講演会開催前に通信についてのアクシデントがあったが、多くの支部長先生方にご参加いただき、今後もこの形態での全国理事会開催について検討していく必要性を強く感じた理事会であった。

◆研修会◆

講演

「新学習指導要領を踏まえた中学校音楽科の授業と評価」

国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官
文化庁 参事官(芸術文化担当) 付 教科調査官
文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官 河合 紳和 先生



本研修会では、次の5つの内容をご講演頂きました。その中の『5指導と評価の一体化について』について掲載します。

- | | |
|------------------------|------------------|
| 1 育成を目指す資質・能力の三つの柱について | 2 音楽的な見方・考え方について |
| 3 主体的・対話的で深い学びについて | 4 言語活動の充実について |
| 5 指導と評価の一体化について | |

【はじめに】

「学習評価の在り方ハンドブック」(令和元年)と「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(令和2年)がともに国立教育政策研究所から発行されているので活用していただきたい。学習評価は、学習状況を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、生徒が学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにすることが大切である。

【学習評価の意義について】

- ①「生徒の良い点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また、各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること」とある。「積極的に評価し」の「積極的」とは、子供たちの伸びている部分、良いところを評価しようということ。何が出来ていないかということに目を向けることも大切だが、この子供はどういうことができるようになったのか、どういうことができているのか、どういうところに進歩が見られるのか、どういうところで良い点が表れているのか、などを評価することが大切である。
- ②「創意工夫の中で学習評価の妥当性や信頼性が高められるよう、組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、学年や学校段階を超えて児童生徒の学習の成果が円滑に接続されるように工夫すること。」とある。

【観点別学習状況の評価について】

「学校における生徒の学習状況を、複数の観点から、それぞれの観点ごとに分析する評価」、「どの観点で望ましい学習状況が認められるか、どの観点到課題が認められるかを明らかにする」こと。大切なのは、これを「具体的な学習や指導の改善に生かす」ことである。

【学習評価の基本的な方向性について】

- ①教師の指導改善につながるものにしていくこと

②児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと

③これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと

この3点がハンドブックの方にも示されている。

【評価の観点について】

育成を目指す資質・能力が、三つの柱に整理されたことを受けて、評価の観点も三つの観点で整理をしている。これこそまさに指導と評価を一体化させるという趣旨に基づいたものである。具体的には、「知識及び技能」を「知識・技能」として、「思考力、判断力、表現力等」を「思考・判断・表現」として、「学びに向かう力、人間性等」については「主体的に学習に取り組む態度」として評価する部分と、題材の学習活動の中で実際は見取れない、評価になじまない、数字による評価、ABC評価になじまないものについては個人内評価として見取り、日々の教育活動の中で生徒に伝えていくことが非常に重要である。よく勘違いされるのは、個人内評価は、評価はするが、評定には残す評価ではないということ。授業の中で声をかけたり、授業の終わった後に、「今日はこうだったね」と子供たちに伝えたりしていくことが重要。

【主体的に学習に取り組む態度の評価方法について】

これまでの「関心・意欲・態度」は「主体的に学習に取り組む態度」と表現は変わったが、言っていることは同じなのかと思う。ただ、「関心・意欲・態度」というのは、関心は関心、意欲は意欲、態度は態度で一人歩きしてしまった部分があったのではないか。この部分で関心を見ようとか、この部分で態度を見ようとか、そんな捉え方を私もしていたし、実際、未だにそういう捉え方をしている先生もいるかと思う。意欲や態度は授業態度ではなく、自分の学習をより良いものにしていく、自分が良い学習をしていくための態度、よりよく学ぼうとする態度ということを改めて大切にしたいと思う。今回、「主体的に学習に取り組む態度」についてこのように整理をしている。「知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身につけたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面という二つの側面を評価することが求められる。」とある。「粘り強い取組」とは、「知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身につけたりすることに向けた」粘り強い取組であることが大切。「自らの学習の調整しようとする」というのは、「自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら学ぼうとしているかどうか」という意思的な側面」のことである。できているかどうかということだけでなく、そうしようとしていることが、主体的に学習に取り組む態度と捉えている。これらについては、「各教科等の特質に応じて、生徒の発達の段階や一人一人の個性を十分に考慮しながら、「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえたうえで、評価を行う必要がある。」という説明がある。ものすごく粘り強く頑張っているが、今日、学習していることは、そういうことではない、というような生徒。あるいは、リコーダーをなんとか吹けるようになりたいと思いをもち粘り強く取り組んでいるが、自分が、何が出来ていないかを分析できていないので、ただ、一生懸命何回も繰り返し、練習のポイントが定まっていない生徒。これらは、粘り強さはあるのだけれども、自分の課題を明確にしようとか、その課題に対してどういう取り組みをしたら、どういう練習の仕方をしてそれをクリアできるのか、ということの調整ができていない生徒。そういう生徒を早い段階で先生が見つけ、声かけをしてサポートをしていくということが重要になってくる。

【題材の設定について】

指導と評価の一体化ということを踏まえ、私たちは題材を構想するときには、育成を目指す資質・能力と評価とを一体的に考えて題材を構想する必要がある。どんな力を子供たちに身につけさせたいのか、ということを確認することによって、私たちもどんなところを子供たちから見取るのかということが明確になってくる。その上で、学習指導要領に示された教科・学年の目標、内容のまとめりとごとの評価規準、これらを踏まえて学習評価を行うことが重要になる。

【中学校音楽科における内容のまとめりについて】

各領域や分野と〔共通事項〕とを関連させて、内容のまとめりを構成している。〔共通事項〕については、「A表現」及び「B鑑賞」の指導と併せて、十分な指導が行われるよう工夫することとしている。〔共通事項〕アは「思考力・判断力・表現力等」に関する内容。イは「知識」に関する内容。アについては、必ずこれがないと学習として成立しないという性質のもので、「思考・判断・表現」の観点の中に明確に位置づけをしている。それに対して、〔共通事項〕イについては、音楽を形づくっている要素及び音楽に関する用語や記号などについて、主に曲想と音楽の構造との関わりを理解する過程や結果において理解されるものである。観点の趣旨には直接には示していない。

【指導と評価の一体化を実現するためのポイント】

評価の場面を精選することと評価方法を工夫することは非常に重要なことになる。「日々の授業の中で生徒の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かすことに重点を置く」これが重要になる。「観点別学習状況の評価は、題材などの内容や時間のまとめりとごとの、それぞれの実現を把握できる段階で行うなど、その場面を精選することが重要」である。「場面を精選する」とは、回数だけの問題ではなく、その場面をどこに設定するかということが非常に大切である。例えば「知識・技能」それから「思考

力・判断力・表現力」がとても良いのだけれど、「主体的に学習に取り組む態度」だけが良くない、あるいは逆の子供もいる。AACとかCCAになりそう。そういう評価が付きそうな時に、その原因は、どこにあるのかということ、突き止めることが大事。この子は、このままいくとAACになってしまう、あるいはCCAになってしまう場合、なぜそういうことが起こるのかを考え、まず、自分の指導を見直していくことが大事になってくる。それなくしてAACがついてしまったとか、CCAになってしまったというのは、これは指導と評価が一体化していないのだと思う。なぜそうってしまったかという原因の追究、そして、その中には、例えば子供たちに明確に授業のねらいを伝えていなかったということがある。場面の精選がしっかりできていたか、はたして、その場で評価することが、最も子供たちを評価する場面として、ふさわしい場面だったのか。こういったことも見直す必要がある。場面を精選するということが必ずしも、回数を減らすことだけではなくて、どこですのかということが非常に重要になってくる。

【「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 事例1の場合】

「指導と評価の計画」の中矢印で示しているのは、継続して学習状況を見取る場面。そして、子供たちの様子を観察等で見取りながら、それを記録に残していく場面については、「知識」は「知」、「技能」は「技」、「思考・判断・表現」は「思」、「主体的に学習に取り組む態度」は「態」で示している。これが場面を精選するということ。「主体的に学習に取り組む態度」は、先生方の取組を見ると、「学習の振り返り」を毎時間書かせていて、それを1, 2, 3時間目と書かせておいて、そして4時間目に先生が読んで評価していくという事例を見せていただくことがある。矢印の部分は、1, 2, 3と書かせて4時間目にまとめて見るという意味ではなく、1, 2, 3時間目に子供たちの取組状況をしっかり観察して評価しながら、なおかつ、それを記録に残すのは4時間目に設定しているという意味。4時間目にまとめてワークシートを見るという意味ではないので、気をつけなければいけない。結構そのように捉えている先生方がいる。もう一つ言えることは、ワークシートだけで「主体的に学習に取り組む態度」を評価してしまおうとする先生方も結構いらっしゃる。やはり、これは観察が大事。むしろ、ワークシートは観察の中で見取れなかったものを補完的に見ていく材料として使っていくことが重要だと思う。そのようなことも含めて、評価方法の工夫。特に評価資料の活用については慎重に行う必要がある。なるべく多くの材料を適切に使って見取っていくことが大事だと思う。

【「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 事例2の場合】

「教師用チェックリスト」を活用した事例が載っている。チェックリストを使いながら粘り強く取り組んでいる様子や、自己調整をしている様子を、生徒ごとに記録していくわけだが、空欄のところがあったりする。空欄になっている生徒のところは、例えばワークシートの記述を見て補完的に評価していくことが大事になってくるので、観察が非常に重要。

【その他の事例】

「生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素を明確にする」
これは丸ごと全国の先生方に覚えていただいて、常に題材を構想するときには、念頭に置いていただきたい。中学・高校は教科の専門家が授業をするので、色々なことを教えたくなる、例えば、「ボレロ」で一定にずっと小太鼓が刻んでいくリズムのこともやりたいし、次々に楽器が変わっていくオーケストラの音色のこともやりたいし、だんだんp pから始まって最後f fのクライマックスに向かって行く強弱についてもやりたいし、AB 2つの種類の旋律が交互に出てくるAの旋律Bの旋律の特徴もやりたいと、気が付くと、旋律もリズムも構成も強弱も音色と、いくつも音楽を形づくっている要素を題材の中に設定してしまっている。これは完全に、子供たちの資質・能力の育成ではなくて「ボレロ」を教える、つまり教材ありきの授業構想になってしまっている。とかく、中学校、高等学校に多い。結局、もし、授業構想の中に音楽を形づくっている要素を今のように音色、リズム、旋律、強弱、構成と5つあげてしまったら、この5つのことを子供たちが知覚・感受しながら思考・判断しないとBにならないことになる。だから、たくさんあげればあげるほど、子供たちがBになるハードルを上げてしまうことになる。ここは、当然、我慢しよう、でも、やはりオーケストラの魔術師ラヴェルがつくった作品なので、オーケストラの音色だけ、とにかく子供たちに感じ取らせようと、絞って題材を構想していくことが重要だと思う。「生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素」の音色の知覚・感受を子供たちにしっかりさせて音楽の価値を聴き取らせていく、そこさえできればBである、という題材の構成。「学習の内容を具体化する」「指導のねらいを明確にする」そして「指導の改善に生かしやすい」ということが重要になる。

【「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 事例4の場合】

複数の領域・分野の関連を図った題材の事例を載せてある。ここで重要なことは、例えば創作と鑑賞の2つを結びつける共通の生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素を「要として」として設定していることである。創作と鑑賞を一生懸命結びつけて授業をやっているが、別々にやってもよいのではないかという授業計画がある。創作で扱っている音楽を形づくっている要素と鑑賞で扱っているものが食い違っていることがあり、関連付ける意味がない授業も散見される。2つを結びつかせ関連を図る有機性をもたせるために共通の音楽を形づくっている要素を設定する必要がある。今回説明した特に評価の部分は、独立行政法人教職員支援機構の研修動画でも配信しているので、併せてご参考にしていただければと思う。

◆研究を振り返って

「ひろげよう つたえよう こたえよう」◆

青森県支部長 米田 裕子 (青森県八戸市立島守中学校校長)



新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、感染予防対策が最優先され、学校生活における音楽科の授業は大変厳しい状況となりました。学習活動は様々な制限され、予困困難な状況において、どのように学びを深めさせるかを問わねがらの取組でした。

学習指導要領改訂の趣旨と要点を理解し、どのような資質・能力を育成するのか、そのために何を大切にし、どのような視点で授業を構成するのか、授業実践から何をどのように改善して生徒に確かな学びをもたらすかについて、3年間研究を進めてきました。

本中学校部会の研究主題「ひろげよう つたえよう こたえよう 音楽の波間で」は、前大会から気づいた視点、新学習指導要領が示す内容、中学生の発達段階、本地域の生徒の実態と目指す姿、これまでの研究の成果と課題などを踏まえて設定したもので、中学校における一連のつながりを図式化し、共通理解を図り進めました。

研究内容の3つの視点とその成果については、

視点1：音楽のよさや価値を実感し、他者と協働しながら学びを深める授業づくり

- 主体的な学びが実現できるようになった。生徒間の意見交流が深まりをもたせることができた。言葉だけでなく、音から音楽のよさや価値を実感し、学習活動を深化させることができた。

視点2：生活や社会における音楽の働き、音楽文化についての理解を深める授業づくり

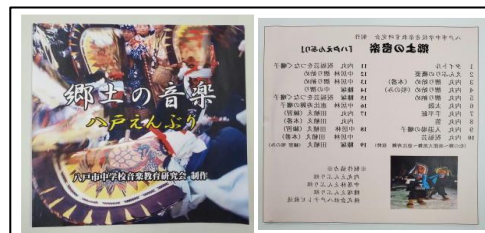
- 音楽のよさや価値などを実感する授業構成ができた。我が国や郷土の伝統音楽を取り扱う際の新たな視点をもつことができた。また、授業のねらいに即した音源教材を作成し、効果的な活用について研究を深めることができた。

視点3：学習内容と指導の手だての明確化と評価方法の工夫

- 指導と評価の一体化を図る上で有効であった。ワークシートの評価場面や具体的評価例について、明示できた。

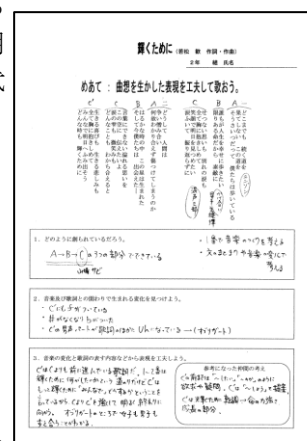
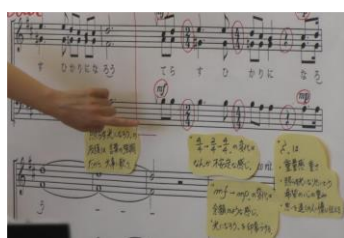
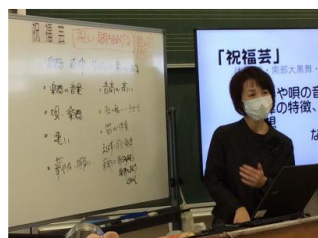
この成果を踏まえて、

- ・生徒が自身の思考の一連の流れを認知するようなワークシートの作成
 - ・指導案作成の際に具体的な場面を設定する
 - ・授業の中での実現場面の工夫
 - ・本質的な問いに迫るための発問の研究
 - ・評価規準、評価場面と評価方法の研究
- 等の課題が見えてきました。



一人一台の端末を活用することについては、様々な試行し「直接自分の考えや気づきを入力する活動により、積極的に自分の気づきや考えを書き込むようになり、授業が深まりがみられた」「全体で考えをさらに練り直し、意見を共有する場面で使用できた」「合唱パート練習の手段として「ストリーム」にパート別の音源を貼り付け、各自で音取りをする活動を試行でき、定着度は高まった」等の成果が得られました。

今後の課題としては、教材準備にかける時間の確保、機材の制限に関する問題、著作権の問題等があげられ、広範囲にわたって取り組むべき課題が見えてきました。課題は多々あるものの、タブレット端末の活用は、曲の構成を理解するために用いることがとても効果的であることに気づくことができました。今後も試行錯誤しながら、より効果的な活用法を考えていきたいと思います。



様々な計画の変更を繰り返しながら苦渋の判断をし、令和3年度全日本音楽教育研究会全国大会八戸・三戸大会が「誌上発表」という新しい形での開催となりました。こういう時だからこそ、「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」を育てる音楽科の役割は大きいと言えます。これまで取り組んできた3年間の成果と課題の詳細や小学校・高等学校との関わりにつきましては、大会誌をご覧ください、With コロナ時代の研究推進について 御意見御助言をいただき、次の山口大会へとつなげていければ幸いです。

これまで、多くの御支援・御指導を賜りました皆様こころより感謝申し上げます。

◆楽しむっちゃ！音楽～響きあおう感動のきずなで～◆

山口県支部長 松田 和寛（山口県山口市立大殿中学校長）



1 大会主題について

子どもたちを取り巻く環境は、急激な技術革新に伴ってめまぐるしく変化しています。身の回りに電子音があふれ、バーチャルな世界と現実が混在する時代、手触りやかおり、ぬくもりといった身体全体の感覚を総動員して感じ取る素材の質感の享受が薄れてきているのではないだろうかと危惧します。また、コロナの影響も拍車をかけ、人と人の関わりの希薄化も懸念されます。生まれた時からこのような環境下で育つ子どもたちが、自然との調和を保ちながら、人間らしく心豊かに生きていくために、感性を磨き、豊かな情操を養っていく音楽教育の在り方が、一層問われていくでしょう。

そして、子どもたちが生涯こわたって、生活や社会の中の音や音楽を親しみながら音楽文化と豊かに関わり、継承し、さらなる新たな音楽を創造していくために、これからの音楽教育が担っている役割は大であると考えます。

平成16年度の中四国山口（岩国）大会では、「すきっちゃ！音楽～つなげよう 心ときめく 感動を～」をテーマに掲げて研究を行いました。その時に、小中高15年間のつながりを重視しようと作成した校種間連携カリキュラムは、先導的な取組として大きな成果をあげることができました。

次の平成25年度の中四国山口（防府）大会では、コミュニケーション能力の育成が最も大切であることを唱え「伝えよう音楽 つなごう心」というテーマで取り組みました。その当時は、山口県ではコミュニティ・スクールの指定が急速に進んでいた頃であり、地域の文化の伝承にも着目しながら研究に取り組んだ結果、音楽教育を通して地域とのつながりを深めることもできました。

このたび山口大会で掲げているテーマ「楽しむっちゃ！音楽～響きあおう 感動のきずなで～」は、子どもたちが生涯こわたって主体的に音楽を楽しもうとする姿を願いとしてイメージしています。これは、学習指導要領に示されている究極のねらい「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成」をめざすものです。

「響きあう」とは、言い換えると「音楽が醸し出す余韻の共有」ともいえるでしょう。響きには趣があり、味わいがあり、情感があります。音は響きで成り立っているといっても過言ではありません。では、その響きが心に響いてくるのは、どういう時でしょうか。「美しい情景に触れた時の感動がいつまでも心の中に持続している時」や、「鳥肌がたつような心の震えを感じる瞬間」などが考えられます。このように、響きとは、音だけでなく心の中の様子も表現しますから、友だち同士がさまざまな感動を享受して、共鳴し合うことを、「響きあう」とことと捉えています。

「感動のきずなで」には、幼保小中高の連続カリキュラムのもと、縦のつながりや時間軸なども視野に入れた音楽感動体験を創りあげていきたい、そして、地域など、関わる全ての人々と共に味わった感動が、さらなる感動を紡いでいき、みんなの喜びを創造していきたいという願いを込めています。

以上のような願いが実現された時の子どもたちの姿を思い描きつつ、生涯を通じて音楽を親しみ、心豊かに幸せな人生を歩んでいくことができる子どもたちの育成をめざして、私たちは、研究を進めているのです。

2 大会の見どころ

令和4年11月1日、2日、山口県山口市で開催される本大会は、1日目に、幼稚園2本、小学校6本、中学校4本、高等学校2本の公開授業による授業研究会と、中四国全県の先生方の研究発表及び大学6本の研究発表を行います。午後は、わらべうた・歌唱指導・指揮法・音楽づくり・和楽器等という5部会でのワークショップです。

2日目の全体会は、新山口駅前オープンしたばかりのKDDI維新ホールにて、作曲家 宮川彬良さんによる講演と、引き続き、宮川彬良さん作曲、湯川ひび子さん作詞で、「山口きずな音楽祭」のテーマ曲である「きずな」を、山口ジュニアオーケストラと山口市内の小中高の合唱団が、宮川彬良さんとともに演奏します。記念演奏は、幼稚園から高校生までが「ふるさと」をテーマにドラマチックに演出をいたします。さらに、本大会のテーマ曲「ふるさとの風」を大合唱奏しフィナーレを飾ります。

この全日本音楽教育研究会全国大会山口大会の一次案内は、山口県音楽教育連盟のホームページに掲載していますので、どうぞご覧ください。

長期間に及ぶコロナ禍も、ようやく終息傾向に向かいつつあるようですが、不安は多いです。ぜひ、全国から多くの皆様をお迎えして、直接お会いしながら開催できることを心より願っていますので、多くの方々にご参加いただき、応援していただけると幸いです。



Information

全日音研中学校部会ホームページもぜひご覧ください。 <http://zennichionken-jhs.jp/>

